



開催日：平成23年11月12日(土)
会 場：国立大学法人東京海洋大学
品川キャンパス

この大会は平成23年度「日本／ユネスコパートナーシップ事業」として、文部科学省の委託を受けて実施しました。

第3回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会

報 告 書

平成23年11月12日(土)

東京海洋大学・品川キャンパス

主催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省、環境省、東京都教育委員会、港区教育委員会、全国連合小学校長会

全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会

全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、日本私立大学協会

社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会

日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会

社団法人日本PTA全国協議会、株式会社教育新聞社

目 次

◆総括	2
◆実施概要	4
◆告知	5
◆大会日程	6
◆実施内容	7
開会式	7
研究授業	9
テーマ別交流研修会	12
第1分科会① ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携（幼稚園・小学校）	
第1分科会② ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携（中学校・高等学校）	
第2分科会 学校間交流	
第3分科会① 教科とのリンク（小学校）	
第3分科会② 教科とのリンク（中学校・高等学校）	
第4分科会 地域や博物館・企業・NPO等との連携	
第5分科会 教材開発 環境教育	
第6分科会 教材開発 国際理解教育	
第7分科会 ESDと評価（学力含む）	
シンポジウム	18
ランチョンセッション	25
協力企業・団体展示、CSRレポート、情報交換会	29
閉会式・持続発展教育（ESD）大賞表彰式	31
◆事後アンケート結果	32

総括

最終年に向けてさらなる発展を目指す

今回の全国大会は、ユネスコスクールのESDの実践研究について相互交流を図るとともに、わが国のESDの普及・発展と、その調査研究の充実に寄与することを目的に開かれ、教育関係者はもとより、一般の方、企業関係者も多数参加した。

午前のプログラムは開会式と研究授業。開会式では、中川正春文科相（代読・藤嶋信夫国際統括官）があいさつ、「我が国の提唱により、国連ESDの10年（2005年～2014年）が進められている。9月にはその最終年会合を日本で行うことが決定し、国際的にもESDへの日本の取り組み、貢献が注目されている」とした上で、「ユネスコスクールは、ユネスコの理念のもとにESDのテーマである環境教育、国際理解教育、世界遺産教育などの取り組みをつなぐとともに、国際的なネットワークを構築することを通じ、ESDの拠点校として役割を果たしている」とその取り組みを称えた。

また、日本ユネスコ国内委員会の田村哲夫会長は、「ESD提唱国である我が国では、教育現場のみならず、地域社会、企業、NPOなどにより多くのESD活動が行われている。その成果は最終年の会合に向けて集大成されていく」と今後の展開に期待を述べた。

引き続き、ESDの先進地である宮城県気仙沼市教育委員会から「被災地からのメッセージ」が発せられた。同教委の及川幸彦副参事兼指導主事が登壇、スライドを用いて被災状況およびそこで懸命に学校生活を送る子どもたちの様子を紹介し、東日本大震災からの復興への挑戦について語った。

●ESDの魅力を示した研究授業

午前中のハイライトは、東京都江東区立八名川小学校による研究授業。

公開された授業は、吉岡佐登美教諭が指導する6年1組の「総合的な学習の時間」。6年生には「江戸・深川の歴史を調べ、この町を語ろう」をテーマに、年間を通して調べ学習を実践している。

地元・深川は東京の下町で、江戸時代から湾岸の水路のある町として発達した古い歴史をもつ町である。単元の目標は、「自分が生まれた地域の歴史や文化に目を向け、そこで続けられてきた人々の営みや思いを知り、いまここで生きる自分と地域のつながりに気づかせ、地域に対する誇りや愛着を育てていく。国内の他の地域やそこに暮らす人々の営みにも共感する資質を高め、自国の文化と他国の文化をも尊重し、互いに協力し合う豊かな人間性を育成していく」としている。

これまでに児童たちは、資料館などを訪れ、地元の歴史や文化を調べてきた。今回はその中間発表を行い、他の児童の発表を聞くことでさらに調べ学習を深めようというもの。さらにゲストティーチャーの話聞くことで「人と関わる力」の育成もねらいとしている。

まず、吉岡教諭がこれまでの授業を振り返り、その後、10人の児童が1人ひとり発表した。内容は専門的であり、参観者も感心して聞く姿が見ら

れた。

れた。

ゲストティーチャーのさかなクンは最初から参観し、児童の発表について「たいへんよく調べられていて勉強になった」と感想を述べていた。また、江戸の料理を調べた児童が江戸時代の寿司を復元したものを持参し、それをさかなクンに試食してもらう一幕もあった。

発表後のさかなクンの特別講義では、同校の児童の研究に合わせて、東京湾（江戸湾）でとれる代表的な魚の生態、名前の由来などをイラストを描きながらユーモラスに説明し、児童と参観者を魅了した。

●ESDの課題とその解決策を探る

午後は、研究協議会である「テーマ別交流研修会」とシンポジウムを行った。

テーマ別交流研修会では、「ESDの深化と拡充」の大会テーマに沿って、ESDの推進拠点であるユネスコスクールがかかえる課題を7点抽出し、7テーマで9つの「テーマ別交流研修会」を設けた。



ユネスコスクールの数も300校を突破し、ESDの実践も徐々に、また確実に広まりを見せている。しかし、それに伴い実践上の課題が浮き彫りにされてくるようになってきた。そこで、各研修会では、ユネスコスクールが話題提供としてテーマに沿った実践を発表し、それを基に研究協議を行った。

例えば、「ユネスコスクールのスタート」に関しては、現状の教育活動を「それぞれの学校の教育目標達成のため、ESDの視点で捉え直し、既存の校内組織を活用する」という共通理解を

得た。また、「ESDと評価」では、「単元毎で教科内や教科・領域間のつながりを明らかにすることは大切であるが、学年間のつながり、小学校でいうならば6年間のつながりを明らかにし、長いスパンで評価をすることも大切である。さらに、小中高大と校種間のつながりも考え、生涯教育としてとらえていくことも必要であろう」との方向性が示されるなど、いずれの研修会でも熱心に研究協議が行われた。

続くシンポジウム「国立教育政策研究所プロジェクト研究『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究』」では、同研究所の五島政一総括研究官、後藤顕一総括研究官が登壇、指定討論者として宮城県気仙沼市教育委員会の及川幸彦指導主事が参加し、ESDのさらなる普及発展に向けた方策などが検討された。



実施概要

■日 時 2011年11月12日(土) 受付 9:30 ～ 開会 10:00／閉会 17:00

■会 場 国立大学法人東京海洋大学 品川キャンパス (港区港南4-5-7)

■対 象 ユネスコスクール関係者(教職員)、一般幼小中高校教員、教育行政関係者、教育研究等関係者(大学・研究所等)、保護者、ユネスコ関係者、ユネスコ協会関係者、企業関係者、学生、その他持続発展教育(ESD)に関心のある方

■参加者 総計 約400名(ユネスコスクール登録校(申請中を含む)、それ以外の学校、自治体、文部科学省関連、企業など)

■主 催 文部科学省
日本ユネスコ国内委員会

■共 催 特定非営利活動法人日本持続発展教育推進フォーラム
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■後 援 外務省、環境省、東京都教育委員会、港区教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、日本私立大学協会、社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、社団法人日本PTA全国協議会、株式会社教育新聞社

■協 力 カシオ計算機株式会社、サンウエーブリフォームショップR&B、積水ハウス株式会社、全国農業協同組合連合会、ダノンウォーターズオブジャパン株式会社、P&Gジャパン株式会社、株式会社リッチェル

告知

チラシ

(表)

文部科学省 日本ユネスコ国内委員会
「平成23年度日本ユネスコパートナーシップ事業」

「明日の視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる」
人材の育成を目指す ESD-Education for Sustainable Development が 2005 年に始まってから 6 年が経ちました。
ユネスコスクール登録校が 300 校(2011 年 8 月現在)を越え、「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年」(DESD)の最終年である 2014 年に向けて、ESD のさらなる普及発展と教育内容の深みが求められます。第 3 回目を迎える本年は、活動の「深化と拡充」を目指し、さまざまな角度から ESD の理解を深めていきます。

**第3回ユネスコスクール全国大会
持続発展教育(ESD)研究大会
「ESDの深化と拡充」**

日時：平成23年11月12日(土)
開会10:00(受付9:30～) 閉会17:00

会場：国立大学法人東京海洋大学
品川キャンパス

東京駅港南地区 4-5-7 <http://www.kaiyodai.ac.jp>

・JR東横線 品川駅南口(東口)から徒歩約10分
・東京メトロ有明線品川駅南口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)
・品川駅南口西口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)
・品川駅南口西口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)

対 象：ユネスコスクール関係者(教職員)、一般幼小中高校教員、教育行政関係者、教育研究等関係者(大学、研究所など)、保護者、ユネスコ関係者、ユネスコ協会関係者、企業関係者、学生、その他持続発展教育(ESD)に関心のある方

主 催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
共 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、財団法人ユネスコアジア文化センター、公益財団法人日本ユネスコ協会連盟
後 援：外務省、環境省、文部科学省、東京都教育委員会、港区教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、日本私立大学協会、社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、社団法人日本PTA全国協議会、株式会社教育新聞社
協 力：カシオ計算機株式会社、サンウエーブリフォームショップR&B、積水ハウス株式会社、全国農業協同組合連合会、ダノンウォーターズオブジャパン株式会社、P&Gジャパン株式会社、株式会社リッチェル

【お問い合わせ先】
NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム(事務局) 事務局 03-3832-3570 E-mail: info@jp-esd.org
【お申し込み締め切り】
平成23年10月14日(金)

(裏)

**第3回ユネスコスクール全国大会
持続発展教育(ESD)研究大会
「ESDの深化と拡充」**

プログラム

9:30～10:00	受 付
10:00～10:30	開 会 式
10:30～12:00	研 究 授 業 特別講師：さかなタケ 学校：東京都港区立八名川小学校6年生 ESD関連団体の展示
12:00～13:30	ランチョンセッション 協力企業団体による社会貢献活動の紹介(昼食付) ESD関連団体の展示
13:30～15:30	テーマ別 交 流 研 修 会 ①ユネスコスクールのスタートと校内連携 ②学校間交流 ③教科とのリンク ④地域や博物館、企業、NPO等との連携 ⑤教材開発A 環境教育 ⑥教材開発B 国際理解教育 ⑦ESDと評価
15:40～16:40	シンポジウム ESDの授業の在り方 国立教育政策研究所特別研究より報告と協議 報告者：吉島 隆一(国立教育政策研究所特別研究員) 後藤 謙一(国立教育政策研究所特別研究員)
16:45～17:00	ESD大賞表彰式・閉会式
17:30～18:30	情 報 交 換 会

※ランチョンセッションでは、持続発展教育に関する企業団体(学校関係者との連携)のプレゼンテーションを行います。(要申し込み可)

大会費は、ユネスコスクール登録校(ユネスコスクール登録校)の協賛によるアジア太平洋ラッピングプロジェクト「おこめRICE」(後援費)で学校間交流を助ける予定です。

【お問い合わせ先】
NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム(事務局) 事務局 03-3832-3570 E-mail: info@jp-esd.org
【お申し込み締め切り】
平成23年10月14日(金)

【お問い合わせ先】
NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム(事務局) 事務局 03-3832-3570 E-mail: info@jp-esd.org
【お申し込み締め切り】
平成23年10月14日(金)

ポスター

文部科学省 日本ユネスコ国内委員会
「平成23年度日本ユネスコパートナーシップ事業」

「明日の視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる」
人材の育成を目指す ESD-Education for Sustainable Development が 2005 年に始まってから 6 年が経ちました。
ユネスコスクール登録校が 300 校(2011 年 8 月現在)を越え、「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年」(DESD)の最終年である 2014 年に向けて、ESD のさらなる普及発展と教育内容の深みが求められます。第 3 回目を迎える本年は、活動の「深化と拡充」を目指し、さまざまな角度から ESD の理解を深めていきます。

**第3回ユネスコスクール全国大会
持続発展教育(ESD)研究大会
「ESDの深化と拡充」**

平成23年11月12日(土) 10:00～17:00

会場：国立大学法人東京海洋大学・品川キャンパス

東京駅港南地区 4-5-7 <http://www.kaiyodai.ac.jp>

・JR東横線 品川駅南口(東口)から徒歩約10分
・東京メトロ有明線品川駅南口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)
・品川駅南口西口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)
・品川駅南口西口から徒歩約10分(品川駅南口西口から徒歩約15分)

対 象：ユネスコスクール関係者(教職員)、一般幼小中高校教員、教育行政関係者、教育研究等関係者(大学、研究所など)、保護者、ユネスコ関係者、ユネスコ協会関係者、企業関係者、学生、その他持続発展教育(ESD)に関心のある方

主 催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
共 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、財団法人ユネスコアジア文化センター、公益財団法人日本ユネスコ協会連盟
後 援：外務省、環境省、文部科学省、東京都教育委員会、港区教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、日本私立大学協会、社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、社団法人日本PTA全国協議会、株式会社教育新聞社
協 力：カシオ計算機株式会社、サンウエーブリフォームショップR&B、積水ハウス株式会社、全国農業協同組合連合会、ダノンウォーターズオブジャパン株式会社、P&Gジャパン株式会社、株式会社リッチェル

【お問い合わせ先】
NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム(事務局) 事務局 03-3832-3570 E-mail: info@jp-esd.org
【お申し込み締め切り】
平成23年10月14日(金)

大会日程

実施内容

開会式



東日本大震災被害者の方々への黙祷の後、開会式が進められた。
(司会：浅井 孝司
文部科学省 大臣官房国際課国際協力政策室長)

1. 挨拶



1) 中川 正春 (文部科学大臣)
代読：藤嶋信夫 (文部科学省 国際統括官)
初めに大会開催への感謝が述べられた。2014年最終会合の日本開催が決まり、国際的にも日本の貢献が注目されていること、ESDの普及促進・概念定着のために引き続き尽力をお願いしたい、ESD実践の成果や評価について議論し「生きる力」育成に果たす役割を共に考えたい、等の内容が、藤嶋信夫氏 (文部科学省 国際統括官) により代読された。



2) 田村 哲夫 (日本ユネスコ国内委員会 会長)
日本ユネスコ国内委員会の提出建議を経て、新学習指導要領へのESD概念の明確な盛り込み等を礎に、ユネスコスクール加盟校も飛躍的増加を遂げた。最終会合に向け、日本における活動成果の集大成を図り「ESDの10年」の後半を盛り上げていきたい。引き続きの支援・協力をお願いしたい。

時間	プログラム
9：30～10：00	受付
10：00～10：20	開会式
10：30～12：00	研究授業 学 校：東京都江東区立八名川小学校 6年生 特別講師：さかなクン (東京海洋大学客員准教授／ お魚らいふ・コーディネーター／ 環境省地球いきもの応援団)
12：00～13：30	ランチョンセッション (協力企業による社会貢献活動紹介) カシオ計算機株式会社、サンウエーブリフォームショップR＆B 積水ハウス株式会社、全国農業協同組合連合会 ダノンウォーターズオブジャパン株式会社 P＆Gジャパン株式会社、株式会社リッチェル (同時開催) 団体展示 特定非営利活動法人開発教育協会、独立行政法人国際協力機構 (JICA)、ジャパン アートマイル実行委員会、一般社団法人たったひとつの命、国立大学法人東京海洋 大学、財団法人日本漢字能力検定協会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、フルブ ライト・ジャパン (日米教育委員会)
13：30～15：30	テーマ別交流研修会 第1分科会①「ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携」幼稚園・小学校 第1分科会②「ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携」中学校・高等学校 第2分科会 「学校間交流」 第3分科会①「教科とのリンク」小学校 第3分科会②「教科とのリンク」中学校・高等学校 第4分科会 「地域や博物館・企業・NPO等との連携」 第5分科会 「教材開発 環境教育」 第6分科会 「教材開発 国際理解教育」 第7分科会 「ESDと評価 (学力含む)」
15：40～16：40	シンポジウム 国立教育政策研究所特別研究 報告と協議 講師 国立教育政策研究所総括研究官 五島 政一 国立教育政策研究所総括研究官 後藤 顕一
16：45～17：00	閉会式・持続発展教育 (ESD) 大賞 表彰式



3) 及川 幸彦 (気仙沼市教育委員会 副参事兼指導主事) 「被災地からのメッセージ」

初めに気仙沼市への支援・励まし、ユネスコスクール・ASPUivNetから東北大学協力のもと各学校に届けられた文房具や義援金等の支援に感謝が述べられた。

気仙沼市では、豊かな自然環境を活かしたESDを展開し、学校教育においても地域への愛情と豊かな国際感覚の育成を目指し、ユネスコスクール認定校も35校に上る。また国連大学から地域の拠点RCE (RCE: Regional Centres of Expertise) に認定され、ESD推進

地域として評価されてきた。

しかし東日本大震災は学校を孤立させ、「子どもの命をいかに守るか」という緊急かつ重要な責務を学校に課した。当日欠席・早退した子ども10数名の命が失われ、防災教育・避難マニュアルの改善・策定も課題。教育再生は地域復興を牽引するとの思いで学校再開を目指し、被災地では最も早く市内一斉に新学期を開始できた。また、生徒も防災教育やESDの学習経験を活かし、地域の復旧・復興に貢献した。ESD理念は、震災直後の危機管理と避難対応等で確実に機能し、今後の復興プロセスにおいてもキーコンセプトとして機能すると確信している。

今大会では、復興に向け子どもと地域の未来を拓くESDのあり方を共に考え、ご指導・ご支援願いたい。

2. 共催者及び来賓の紹介

◆島津 正数

(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 事務局長)

◆古澤真理子

(公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 組織部主任)

◆齊藤 英行

(NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 事務局長)

研究授業

「6年生の総合的な学習の時間の実践について」として、初めに八名川小学校の取組みが発表された。次に特別講師のさかなクンが、東京湾の生き物の話から始まり海の環境問題まで視野に入れた授業を行った。この授業は、同校指導計画の「環境の教育」につながる糸口のひとつとして設定されている。

1. 八名川小学校の実践「江戸・深川の歴史を調べ、この町を語ろう」の発表

1) 実践内容の紹介 (吉岡 佐登美 東京都江東区立八名川小学校教諭)

この授業は6年生児童の地域への関心を深め、自分たちのふるさととして語れるようにさせたいとの考えから、国語科「ようこそ、私の町へ」と社会科「江戸の歴史」をつなげ、総合的な学習の時間に「江戸・深川の歴史を調べ、この町を語ろう」という単元を設定した。児童は、初めに学区域に居住の時代小説家牧秀彦氏から、深川に関する興味深い説明を受け、学習への動機づけを得た。また各種資料館見学等、様々な活動を通して各々のテーマを決め調べを進め、まとめの段階では5年生や保護者に向けた発表を行った。本日はその一部を発表したい。

2) 6年1組 児童による発表

下記テーマについて、10人の児童が発表した。

①「深川の土地のでき方と地名、深川八郎右衛門」

深川は室町時代には海の中にあり、400年以上前には葦の茂る三角州だった。その深川に一族を引き連れて渡り住み、開拓に着手したのが「深川八郎右衛門」だった。彼は「摂津の人」と伝えられている。彼は信仰心が強く、伊勢神宮からの分霊を屋敷のほこらに祀った。これが後の深川神明宮となり地域の人々の心の拠り所となった。

②「深川のふるさと『摂津』」

「摂津」とは大阪府摂津市のことで、川に挟まれ洪水が起きやすく深川に似た環境にあった。「天下の台所」と言われた大阪にとって、淀川の治水策は極めて重要であったため、摂津市は優れた埋立て技術を有していた。その技術をもつ深川八郎右衛門一族が深川に渡り埋立て・干拓を始め、1596年、彼らの技術に驚いた徳川家康が、この地に八郎右衛門の名字「深川」を与えた。

③「深川漁師町と隅田川にいる魚」

「深川漁師町」とは、川や海で漁をする人の町で1670年の建設以来、漁師町として栄えてきた。一方、佃煮で有名な隣の佃島は、家康が摂津の国の漁民を移り住まわせたことで始まった。現在でも富岡八幡宮の祭りで深川の神輿は54騎の最後を飾るが、そこに深川の漁民の誇りが見られる。また隅田川は海水が混入する川で、本来は海にいるはずの赤エイが釣れることも紹介された。

④「江戸時代の東京湾で色々な魚を捕るために、漁師が使っていた方法」

江戸の漁師が、東京湾で魚を捕るために工夫していた多くの方法のうち、「延縄（はえ縄）」「けた網」「打瀬網」という3つの漁法の特徴、各方法で捕れる魚介類等が説明された。また、潮の力を利用する「打瀬網」で捕れる車海老は刺身や寿司で、しま海老はかき揚



げで、シャコは刺身や茹でて甘ダレをつけた寿司で美味しく食べられていたことも紹介された。

⑤「鰻の蒲焼き」

深川には船が通る掘割が多く、そこには餌となる小魚や海老が豊富で鰻も多く生息した。「鰻の蒲焼き」は400年前に調理法ができ、最初に売られたのは門前仲町の屋台だが大阪でも食べられた。しかし大阪は「腹開き」、江戸は「背開き」と調理法が異なった。その理由についてクイズを出し、武士の町江戸では腹を割ると切腹を思わせ縁起が悪く、商人の町大阪では腹を割って話せるようにと腹開きにしたことが説明された。



⑥「江戸前寿司」

江戸時代の寿司は魚に塩をふり発酵させた「なれ寿司」で、現在の「にぎり寿司」は「早寿司」ともいい深川で考案されたもの。深川は労働者が多く、忙しい中でも簡単に食べられるようシャリに味付けをする等工夫された。材料は全て江戸前の鯛や穴子、海老、海苔等を使い、腐らないよう醤油漬けや酢でしめ、ワサビを入れる等、調理法も工夫された。



最後に、深川で食べられる「復元寿司」が紹介され、会場を代表してさかなクンに試食してもらった。

⑦「外食産業と屋台」

江戸時代にはたびたび大火事が起き、中でも「明暦の大火」は木造建築が多い江戸の町を焼き尽くし、江戸城をも焼失させた。江戸の中心は当初、中央区にあったが、大火により深川にまで町が広がった。また復興のために各地から集められた独身男性たちの外食需要が増え、外食産業と屋台が発展した。

次に続く発表として、今日は数多くある屋台の中から、「二八そば」「天ぷら」と深川で有名な「深川めし」の3つが紹介された。

⑦-1「二八そば」

「二八そば」は当時、屋台で移動しながら売られていた。江戸時代のそばは「生そば」から始まり「蒸しそば」「二八そば」と続いた。二八そばの名前の由来についてクイズが出され、小麦粉2そば粉8の割合でそば粉を打ったという割合説が最も有望であること。また二八そばができた理由として、そば粉がつながりにくく食感にも改善の余地があったことが挙げられた。



⑦-2「天ぷらの屋台」

「天ぷら」とは魚を揚げたものを指し、江戸前で捕れた魚（キス、鯛、アナゴ等）だけが使われた。一方、野菜を揚げたものは「精進揚げ」と呼ばれた。当時の天ぷらの屋台の絵を見せ、外食の必要のない町人の奥さんや、屋台に来るような低い身分でない武士が手ぬぐいで顔を隠してまで屋台に来ていたことから、天ぷらが本当に美味しかったことが示された。



⑦-3「アサリを使った深川めし」

深川では潮が引くと干潟が広がり、春から初夏にかけてアサリが豊富に採れた。当初、アサリやネギを味噌で煮込み、どんぶりご飯にのせたものを「深川めし」と呼び、漁師が忙しい漁の合間に食べていた。これは簡単なもので漁師以外には好評でなかったため、新たに炊き込みの深川めしがつくられた。現在、より美味しい深川めしが学校のそばで食べられることも紹介された。



⑧「木場の角乗り」

400年前「木場」という材木の町ができ、川の上に浮かべた材木を揃えたり並べたりする「川並さん」と呼ばれる職人が大勢働いていた。「角乗り」には30cm角長さ5メートルの角材と、バランスをとるための「ため竿」が使用された。「角乗り」の演目には「駒下駄のり」「花籠乗り」「川蟬乗り」等多数あり、歴史ある木場の角乗りは保存会で守られ、毎年開かれる区民祭りで披露されていることも紹介された。



2. 特別講師：さかなクンによる授業

(東京海洋大学客員准教授、お魚ライフ・コーディネーター、環境省地球生き物応援団)



初めに、生徒の発表に多くの学びがあり感動した、との感想が伝えられた。

授業は、さかなクンが江戸前の海に生きる魚の絵を描き、その名前を児童が当てるというクイズ形式で進められ、魚の面白い生態や特徴等が紹介された。

最初のクイズは、江戸前の美味しい寿司ネタ「タコ」。不思議な体の造りが解説され、さかなクンが魚好きになったきっかけがタコであったことも紹介された。

2番目のクイズは江戸前寿司に欠かせない「アナゴ」。穴に籠って暮らす穴籠りという習性からそ

の名がつき、何でも食べる貪食な魚であること、鰻との外観の違い、鰻目（鰻、ウツボ、ハモ等）の特徴として、①幼魚の時クラゲのように透き通っている、②血液に毒が含まれ生では食べられないことも説明された。

3番目のクイズは「スズキ」。スズキ目の魚は世界中で最も多く、鯛、鮪、鯖、ハゼ等もこれに含まれる。海老・カニ・魚等の餌を大量に食べ1メートル位にまで成長し、成長に応じて様々な名前をもつ。日本に生息するスズキ目の20%以上が東京湾で捕れることは、東京湾が豊かな海の証拠といえる。また、東京湾に多く生息する「エイ」は毒のあるトゲで身を守り、海底で暮らす鮫の仲間がエイの仲間になったと考えられていることも紹介された。

授業のまとめとしては、東京湾は豊かな海藻、ウニ、ヒトデ、海老、カニ、小魚等に恵まれ、大切な生き物が暮らすかけがえのない場所で「海の森」とも呼ばれるが、場所によっては人間が捨てたゴミが溢れ、ゴミの中で暮らす魚やゴミを食べてしまう魚がいること、「2048年には魚がいなくなる」という学説も存在すること、等が紹介された。そうならないために、海も陸も含めて日本のかけがえのない自然を大切にすることの重要性が語られた。

最後に、児童から魚の寿命に関する質問があり、鯉は100年程度、深海魚とくにカサゴの一種では200年近く生きるものもいるが、多くの魚の寿命は数年であることが述べられ、授業は締めくくられた。



テーマ別交流研修会

第1分科会①「ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携(幼稚園・小学校)」

発表 東京都多摩市立南鶴牧小学校 主幹教諭 関口 寿也
司会 横浜国立大学 校長 住田 昌治

①実践報告「環境教育からのアプローチ」

多摩市では、市・市教委・地域・大学が連携してESDをスタートし、推進している。南鶴牧小では、エネルギー環境教育実践校の指定を受けていたことから、環境教育を柱とした多様な学び、探究的、問題解決的な学習としてESDをスタートした。

豊かな自然環境を活かして、自然体験や農園活動、野鳥観察等を行ってきた。さらに、企業や地域の協力を得てエネルギー教育を推進してきた。また、環境教育を切り口にしたESDを指導計画に位置づけ、身に付けたい力を明確にして取り組んでいる。



②協議

- ・ESDを学校に持ち込んだ時、抵抗や反対はなかったか？

エネルギー教育実践推進校、環境教育実践推進校、ユネスコ協会の活動が活発、教育長の考え等のきっかけがあった。何もきっかけもないところに持ち込むのは大変だろう。強いリーダーシップをとる人が必要。自然に染みこませる工夫もあるのではないかな。

- ・ESDのよさとは何か？～子どもの姿で評価し、そのよさを伝えていくために～

児童自ら問題意識を持ち、考えるようになることだろう。子どもの変化で教師も変わる。子どもの考えや行動に変容が見られること。自信、自己肯定感を味わうこと。韓国では、問題を発見する力が注目されている。

- ・ESDのよさを伝え、ESDを持続的に取り組んでいくことが課題（公立校では特に）

第1分科会②「ユネスコスクールのスタート ESDの校内浸透・連携(中学校・高等学校)」

発表 東京都多摩市立東愛宕中学校 校長 富田 広
司会 和歌山県立串本古座高校 校長 森本 清仁

1 事例発表

◇ポイント

- ①「身近な比例を一つあげ、ESD的な価値付けを教職員全体で行う」ことによりESDの理解・浸透が早まる。
- ②日々の教育活動をESDの視点で価値付け、意義付けすることが出発点→シンプルな実践でも始めれば深まる。

◇課題

- ①異校種間連携←ESDカレンダーの制作
- ②ESD地域コーディネーターの活用……地域との連携
- ③インターネット等での会議の推進……地球規模での交流

◇出席者からの感想等

- ①評価された点
 - ・校長のリーダーシップ…教員の海外派遣、行政の協力
 - ・「ESD的視点を活用した職場体験」……生徒の好ましい変容
 - ・体験活動の重要性を再確認

②課題

- ・評価、校内組織、教員の負担感

2 課題の確認と解決に向けて……参加しているユネスコスクール校（中学校2校、高校3校）から課題確認の観点から実践発表

（スタートに関しては…現状の教育活動を「それぞれの学校の教育目標達成のため、ESDの視点で捉え直し、既存の校内組織を活用する」という共通理解を得た。）

◇課題と解決

①校内の指導体制の確立と教員のスキルアップ

＜解決法等＞公立校の場合、教員の異動等に対する対応も含めて考える必要あり

- ・教員研修の機会の充実～校内研修の充実、ファシリテーター教員の育成、海外派遣
- ・中学校…ESDカレンダーの作成
- ・高校…進路指導、生活指導、特別活動、道德教育等の年間指導計画を、ESDの視点で捉え直し、ESD教育の年間指導計画を作成

②地域等との連携

＜解決法等＞

- ・地域を巻き込む仕組み作り…NPOとの連携等
- ・実践に役立つユネスコスクール間のネットワークづくり
- ・行政との連携に向けてのユネスコの支援（多くの地教委は無関心!?）

③ 評価の困難性（課題の確認のみ）



第2分科会 「学校間交流」

発表 宮城県気仙沼市立松岩中学校 教諭 森 美紀子
司会 千葉県立市川昂高校 校長 齊藤 孝

(実践報告)

過日の東日本大震災により、現在学校のグラウンドに83世帯の仮設住宅が設置されており、森先生自身も8月から仮設住宅での生活でそこから学校に通勤している。

森先生の「福祉の里づくり」と題した発表の内容は次のとおりである。

平成21年にASPnetに加盟したばかりであるが、近隣の特別支援学校と学校間交流をしている。交流活動としては、年4回、運動会・レクリエーション・グランドゴルフ・クリスマス交流を実施している。成果としては、特別支援学校の生徒と自然に対応できるようになったこと、次の交流に向けて自発的に考えることができるようになったことである。

課題としては、昭和50年代から継続している交流活動なので新しい活動が生まれにくくマンネリ化している。

また東日本大震災後、外国を含む複数の学校と交流が出てきた。

また、震災後まずボランティア活動を始めたのは岩松中学校の生徒であったのは、この福祉の交流の結果である。

交流を成功させるためには、交流目標の明確化と共通理解がポイントとなる。



(質疑応答・協議)

年間指導計画、これからの方向性、交流に伴う教員の負担、学校内のサポート体制、支援学校の生徒の意識の変化などについて質疑応答が行われた。協議では、交流において細く長く、相互に学びあう対等な交流を行うことが大切であることが確認された。

第3分科会① 「教科とのリンク(小学校)」

発表 東京都江東区立東雲小学校 教諭 廣瀬 修也
司会 宮城教育大学 教授 市瀬 智紀

最初に江東区立東雲小学校の実践報告があった。「いのちかがやけ」をテーマとする国語や道德などの教科と結びついた人権・道徳学習の実践をもとに、質疑応答が行われた。次に分科会のテーマとして、「各教科の学習でESDをどうやって浸透させるか」を課題としてグループ討論が行われた。

「どうやってESDを教科の中に浸透させるか」という具体的な方法よりも、「そもそもESDとは何なのか」が議論の中心となった。抽象的なレベルでは、将来を見通せる、人が繋がる、自分で判断ができる、積極的なコミュニケーションができるようになるような活動を行うのが、教師の側からみたESDである。

一方で、子どもの側からすれば、学習したことが「頭の中で」関連付けられ発展させていければ、ESDが実現できているといえる。

すなわちESDの教科へのリンクについては、教員が明示的に教科と結びつけて提示するよりも、子どもの頭の中で学んだことが自然にリンクしていくような学びが大切である、ということができる。



第3分科会② 「教科とのリンク(中学校・高等学校)」

発表 静岡県伊豆市立天城中学校 校長 大塚 明
司会 渋谷教育学園渋谷高校 教諭 北原 隆志

中学や高校では各教科が個々に授業の内容や方法を決定するので、多くの教員が「現行の授業で十分である。」と考えている学校では、ESDと教科とのリンクは実現しにくい。

その解決策のひとつとして有効であるのが、教科を超えた課題への取り組みである。

伊豆市立天城中学校では生徒に自尊感情を持たせることを目的とし、地域の環境保護に取り組んだ。

その結果、自尊感情だけでなく、各教科学習に対するモチベーションも高まった。学校における学習と自分達の生活のつながりを意識するようになったからである。そのような課題が見つからない学校ではどうすれば良いか。これについては持続可能な社会作りの担い手を育成する必要性を各教員が感じるようにならなければ難しい。それを共通の目標として、自分の授業で実践可能なことから始め、無理せず継続する。

生徒の学習態度の変化を見れば、学校全体がESDを意識した授業の実践に向けて動き出すだろう。



第4分科会 「地域や博物館・企業・NPO等との連携」

発表 宮城県気仙沼市立気仙沼小学校 教諭 及川 理恵
司会 筑波大学附属坂戸高校 教諭 石井 克佳

気仙沼小学校では、気仙沼市役所危機管理課と連携し、平成22年9月1日防災の日に全校防災教室を実施した。

その後も防災教育での連携が進み、今年3月11日に発生した東日本大震災では大地震に引き続き6m以上の津波が到達したが、児童も保護者も防災マップを参考に避難し大きな成果を得た。

避難後児童からは、「自分のできることをきちんと行い、皆と協力する」ことの大切さを実感する声が寄せられた。数々の画像や資料を通して、震災の凄まじさとそれを体験した人々の思いがストレートに伝えられ、日頃の防災教育の大切さ、学校が家庭や地域と連携することの意味を考えながら、誰もが子どもの顔を思い浮かべていたであろう。

フロアからは、学校や地域での教育活動、企業の社会貢献活動、NPO法人の特色ある活動等が報告された。参加者の様々な実践の姿を知るとともに、ESDの活動を通して誰もが子どもたちの人間形成に貢献できることを確認することができた。この研修会が、さらなる連携への新たな一歩となることを願っている。



第5分科会 「教材開発 環境教育」

発表 宮城県気仙沼市立津谷小学校 教諭 千葉 和一
司会 千葉県市川市立稲越小学校 校長 本多 成人

本研究協議では、提案者から学校全体で長年取組んできた『緑化活動』と『学年別活動』をESDの観点から見直しを行った報告がなされた。通常「収穫や試食」で終わる活動が多い中、津谷小では「つなげる」活動が用意されており、子どもたちが主体的に取り組んでいる。そのことに質疑が集中した。



話し合いの中で次のような成果があった。

- ①植物を教材として扱う場合、数に余裕を持って準備をしておく（不測の事態に備えるため）
- ②その道の名人から教えてもらう場合、人材バンクのようなものを作りストックしておくとい
- ③調査を行う場合、データの蓄積が大切である
- ④教育課程への位置づけをはっきりさせておく等

課題として、

- ①環境教材がなかなか広まらない
- ②中学や高校は教科担任制であり、広まりに乏しい
- ③総合で扱っているが、系統化が難しい

一方、高校で「環境」という新たに教科を創設し実践してきたという報告や、企業や大学など外部との連携も必要で、進学実績に結び付けることが課題であるという報告もなされた。以上が話し合いの骨子である。

第6分科会 「教材開発 国際理解教育」

発表 広島県立尾道北高校 教諭 高村 聖悟
司会 玉川大学 教授 小林 亮

第6分科会では、高村聖悟教諭による尾道北高等学校におけるESDの取組みについての発表に続き、参加者の先生方（小学校、中学、高校）によるグループ・ディスカッションが行われた。その際とくに、①ESDの視点に立った国際理解教育とは何か？ ②学校現場でESDをどう浸透させるか？（推進体制の充実）という2つの課題をめぐって議論が行われた。

第一の課題については、まず指導者である教師自身の立ち位置を明確にすること、とくに国際交流において全ての児童生徒にどういう力をつけさせようとするのかを意識した国際理解教育を実施することがESDにつながるという論点が出された。第二の課題については、ESDに関し関心や熱意のある先生が独走するのではなく、学校内の児童生徒および教員を巻き込んで全員参加の活動プログラムが開発できるかどうか成功の決め手であるという意見が複数の参加者から出されていた。

後半ではさらに、小学校、中学校、高校1（西日本）、高校2（東日本）という4グループに分け、ESDの視点に立った国際理解教育を展開する上での問題と解決法を、それぞれの学校現場の状況から話し合ってもらった。ESDを実践することの具体的メリットを明示することが重要であるという指摘や、教科横断的（学際的）アプローチの有効性など、各グループから様々な意見が出された。なかでも、学校、家庭、行政、地域をつなぐネットワークづくりがESDの視点に立った国際理解教育の推進にとって決定的に大切であるという論点が共通認識として出された。また学校間交流および国際交流により、具体的なプロジェクトについての情報交換ができる枠組を作っていく必要があることが確認された。



第7分科会 「ESDと評価(学力含む)」

発表 広島県福山市立駅家西小学校 教諭 村上 克行
司会 新潟大学附属長岡中学校 教諭 神子 尚彦

本協議会では、広島県福山市立駅家西小学校からESDの実践が報告され、評価について協議がなされた。その中で、以下の3点について課題や方向性が見出された。

- ①単元毎で教科内や教科・領域間のつながりを明らかにすることは大切であるが、学年間のつながり、小学校で言うならば6年間のつながりを明らかにし、長いスパンで評価をすることも大切である。さらに、小中高大と校種間のつながりも考え、生涯教育としてとらえていくことも必要であろう。
- ②教科の評価の観点にESDの視点をどのように取り入れていくべきかがカギである。教科の評価に合わせて、4つの観点で評価することが望ましいのではないかと。しかし、中学校や高校では教科担任制であるため、教科間のつながりを意識した評価は難しい面もある。
- ③小学校に比べて、中学校・高校は教科よりも総合的な学習の時間や特別活動を中心にESDを取り入れている場合が多い。各活動でどんな力を身に付けさせたいのか、また、どこでその力が身に付くのかを考えていくことが大切である。



シンポジウム

国立教育政策研究所プロジェクト研究 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」 （司会：宇野 彰人 NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事）

学校現場においてESDは徐々に浸透してはいるものの、指導計画等に戸惑いがあるのも事実である。

当シンポジウムでは、ESDの具体的な授業開発等をしている国立教育政策研究所が現在推進しているプロジェクト研究「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」の報告を基に、望ましいESDの授業の在り方について共に学んでいきたい、と司会者から開催の言葉が述べられた。

そして研究に携わっている講師2名からそれぞれ研究内容が報告され、それに対する感想・質疑応答を経てシンポジウムは幕を閉じた。下記にその概要を記載する。

1. 研究報告

1) 理論的枠組みの開発

講師：五島 政一 国立教育政策研究所 総括研究官

国立教育政策研究所の使命は、全国の学校にESDを定着・充実してもらうために、わかりやすい資料を作ることにある。実際には、理論的枠組みを設定し実践研究を基に検証する、という研究を行っている。本日は、教科等においてESDを具体的に実施する方法として、目指すべき能力・態度に重点をおいて展開するパターン「視点整理型アプローチ」について説明する。

世界規模で進められているESDには多くの資料があるが、当研究では「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」（関係省庁連絡会議、2006）、「ESD資源レビューツール」（英国教育技能省、2005）、「ESDツールキット」（R.Mckeown,2002）、ESDのパフレット等の資料を参考に基本的枠組みを構築した。そして全国どこの学校でも導入できるよう、普段の総合的学習の授業にハードルの低い形で展開してもらうための内容を考えた。

ESDの目標は、環境・経済・社会において持続可能な将来が実現するよう変革をもたらす行動ができる人を育てることにある。日本の学校教育においては「生きる力」の育成が重視されているため、「生きる力」と統合させたシンプルな学習指導の目標を設定した。それは、「持続可能な社会づくりに向けて課題を見出し、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付ける」というもので、まさに「生きる力」を求める内容となっている。

「持続可能な社会づくり」という視点を意識し加えることで、普段の授業が少しずつESD的に変わっていく。その理論的枠組みは3つの内容で構成されている。まず授業に付加すべき要素・概念を「持続可能な社会づくりの要素」として6つにまとめた。次に従来の学習指導要領の視点に倣い、授業を進める中で育成する能力・態度を明らかにすれば先生方も導入しやすくなると考え、「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」として7つを挙げた。さらに指導する上での活動



いイメージ)、③「有限性」（100年後の子どもたちのことを考え、限りある物質・エネルギーの節度ある使い方）、④「公平性」（人権や生命が尊重され互いが犠牲にならず恩恵を受ける社会をつくる）、⑤「責任性」（一人ひとりが積極的に責任を持ちあるべき社会をつくる）、⑥「協調性」（多様な価値観や文化の中で互いに良いところを認め協力していく）、の6つとした。この中で①「相互性」②「多様性」③「有限性」は、従来の環境教育における理科的な内容に当たり、④「公平性」⑤「責任性」⑥「協調性」は、ESDが社会的・道徳的内容を含むため、その要素として加えた。これまでは社会的・道徳的内容を付加することで、ESD的な内容になる傾向が見られた。

次に「重視する能力・態度」としては、①「批判的に思考・判断する力」（建設的により良いものを作るために多面的な視点から捉えるイメージ）、②「未来像を予測して計画を立てる力」、③「多面的、総合的に考える力」、④「コミュニケーションを行う力」、⑤「他者と協力する態度」、⑥「つながりを尊重する態度」、⑦「責任を重んじる態度」（自ら世の中を変えようとする態度）、の7つを挙げた。学校においてESDを推進するためには「生きる力」と関連付けて整理する必要があるが、その構成要素の多くがESDで重視する能力・態度と重なっている。そして「生きる力」を意識して「持続可能な社会」を考えれば、ESDとは新しい言葉ではなく先生方がすでに実践していることであることがわかり、そのことを先生方に認識してもらうことも大切である。ESDとはトレンドではなく教育の本質と関わりがある。

さらに「留意事項」としては、①「教材のつながり」（他教科とのつながりを意識することで生徒も多面的に見れるようになる）、②「人のつながり」（学校以外の様々な施設を活用し子ども同士・校外の人々・施設のつながりを意識してカリキュラムを組む）、③「能力・態度のつながり」（理解度で判断する従来の教育ではなく、学んだことを基に社会に貢献できる行動力につなげる教育。これは教育のエッセンスとも言える）、という3つの「つながり」の視点でまとめた。

実際に、このような形でこれまでの授業に付加することで、無理なくESDを導入できたという成果も挙げられている。

私が尊敬するESDの教員を挙げるなら「宮澤賢治」である。彼は地質学者だが、地質学のみならず童話や詩を作り、農民のために品種改良や土の改良をする等、北上川で授業をしながら世界に目を向けていた。彼のような教員は今も昔も今後もいるだろう。より良い教育とは理論と実践をつなぐことで、宮澤賢治のようなセンスを持った人を育成することはできる。そうした先生のもとでは、子どもたちは生き生きと学び、地域を大事にし、世界に目を向けることができるだろう。

2) ESD試行授業を通しての実践研究例

講師：後藤 顕一 国立教育政策研究所 基礎研究部総括研究官

まず初めに、新しい学習指導要領にESDという視点がどのように取り込まれているかという点をお話したい。「持続可能」という言葉は、以前の学習指導要領には全く記載がなかったが、新しい学習指導要領の解説には、小学校では19か所、中学校では47か所、高等学校では108か所の記載がある。ESDは、小中高の教育において取り組まなければならないもので、高校では、地理・歴史・公民・理科・保健体育・家庭科・総合的学習に含まれ、ほとんどの教科で扱う必要があるとの認識で学習指導要領に組み込まれている。導入しやすい部分から入り、徐々に対象となる教科を拡大していくものと考えている。

学校へのESDの導入については、なかなか進んでいないという現実もある。ESDのような大きいプロジェクトはハードルが高く実施しにくい等の声が聞こえており、当研究所としては導入しやすい方法を考え、導入を後押ししたい。ESDの研究も2年目となり転機を迎えている。1年目は試行的に大きな2つの視点で進めてきた。今日はその一つ「視点整理型アプローチ」という実践について述べたい。

「持続可能な社会づくりの要素」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」、そして「ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項」を意識して授業を構成し組み立てれば、ESDの視点に立った授業が行えると考えており、先生方にもESDの視点に立った授業を実施いただくようお願いした。

本日は、広島大学附属福山中学校・高等学校の山下雅文先生の事例を紹介する。この事例は、優秀な中学校理科の実践事例としてホームページにも掲載されており、その実践価値は、ESDの「持続可能な社会づくりの要素」と「重視する能力・態度」と「留意事項」を上手につなぎ、生徒もそれを実感しながら体験できた点にある。また「自己制御能力」という新たな資質・能力についても自然に身につけるきっかけになったとも感じると共に、科学技術に対する肯定的な見方・考え方を育んでいる点にも研究価値を見出した。

山下先生の単元の狙いは「エネルギー資源の利用や科学技術の発展と人間生活との関わりについて認識を深め、自然環境の保全、科学技術のあり方について、科学的に考察し判断する力を養う」とあり、元々 ESD的な内容になっていた。そこにさらに先生の自分なりの意味を付加し、「持続可能な社会づくりの要素」については、「相互性」「多様性」「有限性」の3つを強調し、「重視する能力・態度」については、「批判的に思考・判断する力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」の3つに注目して授業を構成されていた。さらに「留意事項」については、技



術科・社会科とのつながりの強化、他教科との関連の可能性、実験から始まりまとめまでの学習段階での「人のつながり」を意識しながら授業を組み立てられていた。

実際に2時間目の授業を拝見したが、授業の中で生徒が身をもってLED電球と白熱電球の違いを体験し、生徒に色々なことを考えさせる素晴らしい授業だった。山下先生からは、「ESDの視点を取り入れて授業の構成を考えたことで授業の改善ができ

た」、「『視点整理型アプローチ』は取りかかりやすい」、「今後の可能性としては他教科とのつながりや総合的な能力を育てることができるのではないか」、等の意見をいただいた。

生徒からは、「この授業で意識が変わった」「知っていることも多かったが知識を活かすことができるようになった」「白熱電球は紫外線を出しているということを初めて知った」等、素晴らしい感想が挙がっており、「多面的・総合的に考える力」と「批判的に思考・判断する力」が育っているという印象を得た。また、「多量にエネルギーを使用しているのが分かって節電しようと思った」という感想からは、「自己制御能力」も育っていると感じられ、まさに私たちが設定した目標につながっていた。3時間目の授業後に行った生徒の調査からも、「興味を持てた」「視点が身につく」「これからの生活に役立つ」という意見が多数挙がり、「重視する能力・態度」についても、「未来像を予測して計画を立てる力」以外の「批判的に思考・判断する力」「多面的・総合的に考える力」の2つに関しては大変意味を持って授業に取り組めたという感想であった。

一方、生徒からの授業に対する否定的意見としては、「もっと新しい実験がしたい」「知識は元から身につけていて授業で扱うまでもない」等の厳しい意見も出ている。これらの意見からは知識を得たところで留まろうとする傾向が見られる。その点は残念だが、こうした意見も活用して次につながりを作るのが授業の目的なので、これらの意見も新たな授業構成のヒントになると考えている。今後の課題は、「チェック型アプローチ」との融合を図ると共に、さらなる検証が必要と考えている。

2. 研究報告を受けての感想・質問

1) 指定討論

指定討論者：及川 幸彦 宮城県気仙沼市教育委員会 副参事兼指導主事
現場の目線で、ESDの研究に対する感想や期待・要望等を述べたい。

初めに、この研究には全国の学校にESDを普及させるという使命がある。その使命を実現するための要素を考えると、①教育現場でESDをやることの意義を感じるか（子どものためになるか）、②実際に実施するときの取組みやすさ（ハードルの低さ）、③教員自身が楽しんで実践できるか（子どもの楽しさにつながる）、④教育課程として組み込まれているか、という4つが挙げられる。そして、この4点から当研究を考察すると、それぞれの点について高く評価できる。取組みやすさはもちろん、教育課程にも明確に位置付けられており、教育的意義という点でも整理されている。先生方もこれなら必要という考えを強められたのではないかと。今後さらに興味深いものにしていくためには、教員の技の部分の研究が必要であると考えている。

中でも、枠組みにおける「持続可能な社会づくりの要素」や「重視する能力・態度」の抽出のところで、学習指導要領の最大の柱である「生きる力」とESDを理論的にしっかりと結びつけたことは、極めて評価できる部分で非常に力づけられた。これは、すでにESDに取り組んでいる教員にとっては自信の根拠をもたらし、今後新たに始める教員には安心感と勇気を与える重要なポイントだと思う。また、OECD（経済協力開発機構）の言う「キー・コンピテンシー」と関連付けた点も高く評価している。ESDと学力向上を二律背反と捉えている教員もいるが、この研究によって両者が結び付けられたことにより、ESDを通した学力向上という道筋が見えてきた。ESDが学力向上にも寄与するということを強調できる理論的根拠にもなると思う。今後は、ESDを実践することで検証を進め、成功事例を明確に示していくことが必要になってくると期待している。

具体的には3つの期待をもっている。1つ目は「学び方」について。ESDは持続可能な社会について学ぶ教育ではなく、持続可能な社会をつくるための担い手をどう育て、そのための教育はどうあるべきか、にポイントがある。しかし、この「教育はどうあるべきか」は第1段階で、「どのような能力・態度が必要か」は第2段階にあたり、さらにもう1段階必要ではないか。つまり、それを実現するための「学び方」としてはどのようなものが必要か、という点である。今回の指導要領には出てきていないが、それについての今後の追加研究にも期待したい。

2つ目は、「重視する能力・態度」の表現と中身について。7つの「重視する能力・態度」は中高生には適切であっても、小学生にはもっとモチベーションを与える部分を入れ込むべきではないか。感受性や知的好奇心や感動する部分をどう捉えるのか。原動力となる心や感動力の部分を大事にすべきではないかと感じている。

3つ目は、発達段階に応じた「重視する能力・態度」育成の考え方について。言葉が硬いということも関わるが、子どもの発達段階に応じて7つのどの部分を育てていかなければならないの



か、発達段階に応じて育成する部分を徐々に移行しながら、中心とすべき部分に焦点を当てるという考え方で学習過程を組み立てていく必要があると思う。年齢に応じて、長期的に取り組むべき部分と焦点を当てるべき部分が必要ではないか。例えば「批判的思考」についても、小学校と中学・高校では中身が異なると考えられ、表現も含め整理していく必要があると思う。ESDを持続的に発展させるためには、こういったアプローチや考え方も必要になってくるのではないかと考えている。

◆五島先生からの意見

1つ目の「学び方」について。「留意事項」には指導法のビジョンも入れている。総合的に学ぶことで教科のつながりを考えることになり、教師がそのように考えれば子どももそうなる。また「人のつながり」では、これまでは教師の教え込みだったが、子ども同士の学びあいや子ども中心の学習・問題解決を進めていこうとの考えが込められている。ただ解説しすぎるのは良くないため、どこまで記載するかは非常に難しい問題。そのバランスを取り現場の先生から意見をうかがいながら、3月発行予定の最終報告書を作成している。指導法・学び方については、より明確化する方向で企画委員にかけたい。

2つ目の「重視する能力・態度」の中身の硬さと表現については、私もそう思っている。実際に小学校の先生から「もっと優しい言葉を」という意見も出ており、研究テーマの一つである。小学校でも低学年・中学年・高学年で言葉が違うのではないかと考えており、感性についても低学年では当然意識する必要がある。最終報告書では現行より多少砕けた表現で出す予定だが、程度の問題については検討中である。

3つ目の発達段階に応じた「重視する能力・態度」育成の考え方はまさにその通りである。7つの目標についても小学校で育成するのはどの部分なのか、言葉を変えることで見えてくるかもしれない。どこまでできるかはわからないが検討中である。教員研修を進めていく中で、明らかになっていくのではないかと、とも考えている。

◆後藤先生からの意見

初めにプロジェクト研究としては、まだ研究中であることを申し上げたい。

及川先生の意見は現場の目線とのことだが、研究の視点としても価値が高く意義深いものなので、やれるところまでやらせていただきたい。

1つ目の「学び方」については、他プロジェクトでもスキルと絡む大きな問題につながり、問題解決の中の大きなテーマになると思う。

2つ目の「重視する能力・態度」の中身の硬さと表現については、実はこれまでも批判をいただいており工夫が必要と考えている。ただ、言葉というのは次々にイメージが広がるという難しさがあり、小学校版・中学校版・高校版と3つが並ぶと、次々にイメージが広がってしまう怖さもあるので、慎重に検討することになると思う。

3つ目の発達段階に応じた「重視する能力・態度」育成の話は素晴らしい。カリキュラム構成についてもハイブリッドということで非常に意味深い。身につけたい能力という大きな絵を描きながら、それを発達段階に応じてマッピングしていくという深くて重い提案をいただいたと思う。現在は並列的に並べているが、ESDで本当に伝えたいものを見つけないといけない。そして、それが発達段階に応じて徐々に変化すると捉えなければいけないと考えた。

2) 質疑応答

感想・質問①

分科会でも、なかなかESDに乗りきれないという意見がでていた。

また「持続可能な社会づくりの要素」に、「必要性」という言葉も入れてほしい。ESDで育つと良い子になるとか学力が向上するとかの結果ではなく、そういう子が育たないと地球や人類がだめになるという必要性。これこそが動機づけになると思う。

◆五島先生からの回答

そのような「必要性」も含めて考えて6つに分類した。必要性を感じて積極的に実行し、必要性はまさに公平な世の中をつくっていく。ただ、言葉を6個にする苦労は大変なもので、現在もバージョンアップを図っている。研究協力者の意見もうかがいながら最終報告書をまとめていきたい。大幅には変わらないが、2～3割はより適切な言葉に変えている。3月号を楽しみにしていただきたい。

感想・質問②

非常に勉強になった。

発達段階に応じた能力・態度の焦点化がESDで必要とのこと、発達心理学を専門としているので共感した。但し、発達段階には個人差があり、発達に問題がある子どもの特別支援教育や多文化共生の問題は非常に重要で、ESDとも関わってくると思う。発達あるいは日本語能力等、様々な発達側面について多様なニーズをもつ児童のために、どのようなESD的支援が可能とお考えか。

◆五島先生からの回答

個人的意見だが、そうしたことを先生方が考えることが最も大切だと思っている。つまり目の前にいる子どもに合うものを先生が探すということだが、それを教科書等の書類に落とし込めるかという問題もある。先生方が子どもや地域の実状に応じて、臨機応変にカリキュラムを構成する力をつけるということは、総合的学習やESDの求めていることで、宮澤賢治が行ってきたこと。そうしたことを教えるのは教科書ではないのではないか。先生方が子どもの現状や発達段階・地域の現状に応じて独自のカリキュラムを作っていけば、それがアイデンティティになり世界との比較にもなる。ESDとはそうしたもので、決して新しいことではなく教育の本質だと思う。従って、そうしたことを考えながらESDを進めることが大切で、それをESDで再確認できると考える。

ランチセッション ～協力企業による社会貢献活動紹介～

協力企業7社が、それぞれの活動内容について発表した。

ダノンウォーターズオブジャパン株式会社



発表者：黒住 朋代（財務部アシスタント）

ダノングループの使命には、「栄養と健康を届ける会社でありたい」と、グループ創始者の述べた「社会的責任を果たす会社であり続けること」の2つがある。水を使った社会貢献ができないかと考え、2007年に社会貢献プログラム「1ℓ for 10ℓ」をスタートした。毎年売上の一部を日本ユニセフに寄付し、西アフリカのマリ共和国に井戸の建設・メンテナンスを行ってもらっている。プログラムの目的は、マリ共和国への

の清潔で安全な水の提供と、日本におけるアフリカの水問題・水資源についての啓発活動の実施、の2点である。

啓発活動としては、「ボルヴィックお水の教室」という取組みがあり、NPO法人Waterscapeと共に、小中高生を対象に展開している。社員ボランティアが学校に出向き、水の「ろ過実験」や「カルタゲーム」、クイズ等を通して、楽しみながら水の重要性を学んでもらうものである。

2010年夏に実施した授業後アンケートでは、97%の生徒・保護者から授業内容を評価いただき、少しずつ啓発内容が浸透している感触を得ている。そこで、この取組みを1企業の枠を超え、さらに広げようと教師向けのマニュアルを作成した。マニュアルには学習指導要領にも対応した3パターンで、科目や授業の進捗に応じて活用していただきたいと考えている。2011年秋には、青森県三沢市の学校でマニュアルを活用した授業が行われ、その授業風景も紹介された。このマニュアルは既に約90校に届けられているが、より多くの先生方に使ってもらい意見や提案を頂戴し、今後の改善につなげたい。

カシオ計算機株式会社



発表者：若尾 久（CSR推進室）

企業の社会貢献として何ができるのかを検討した時、子どもの不登校や自殺、いじめ等、子どもたちの世界の深刻な問題が見えてきた。こうした難題を乗り越える力を子どもにもってもらうことを目的に、2004年からの試行を経て、2007年「命の授業」を本格的に開始した。

この授業は5つの柱「三つの学び（絆、命の創造、心の成長）」、「命の大切さ」、「命の絵の描写」、「地球環境」、「世界の子供たち」で構成され、90分授業を基本単位としている。

これまで幼稚園児から大学生までを対象に授業を行い、約120校、約1万人の子どもたちに命の大切さを伝えてきた。

具体的には、1人は全ての人と繋がっているということを感じ取ってもらうために用意した絵を見せ、実際に命の絵を描いてもらう、友達と握手をしてもらい感じたことを尋ねる、聴診器で命の鼓動を聞く、地球上で貧困に苦しむ人や子どもの死亡数等についてわかりやすく説明する、等のプログラム内容になっている。その他にも、ガンで亡くなった猿渡瞳氏の「命のスピーチ」を聞いてもらい感じたことをじっくり話す授業、カンボジアの子どもたちの写真を見せ命や貧しさ・幸せ等について考える授業、また、日本初の小学校によるエコプロダクツ出展を実現し児童に大きな成長がみられたこと、亡くなった子どもの育てた花や花の種を学校に配布する活動等々、様々な形で命を感じてもらう場として「命の授業」を展開している。

サンウエーブリフォームショップ R&B



発表者：樋口恵美子（マーケティング本部 営業企画統括部ソリューション企画推進部）

2011年春に当社を含む5社が統合しLIXILとなり、CSRについても森の活動や海外の活動等、幅広く展開している。（森林活動の一環として、間伐材の炭から作られた脱臭剤も配布・紹介された）

当社はキッチンを作り続けて50年を超えるが、キッチンには食事を作るだけでなく、人とのつながり、憩いのできる場所としての意味もあると考えている。そこで家庭におけるキッ

チンの位置づけ・役割を、子どもたちにより明確に伝えるために道徳教材を作成した。教材作成にあたっては、東京家政学院大学の長谷徹先生に協力いただいて、小学1年・4年・6年生向けに授業に使えるよう、先生方の使いやすさを考慮して内容を組み立てた。

昨年9月から配布を始め、現在189校、約500セットが使われている。利用した先生からも、「絵が楽しく授業が盛り上がった」等の感想や、子どもの反応から家庭の実状がわかるという点でも有効との評価をいただいている。昨年は、中学・高校、さらには大学からも使用の意向をいただき、実際に大学の授業で教材研究の題材として本教材を活用していただいた。

また、昨年の第2回ユネスコスクール全国大会 ESD研究大会をきっかけに、本教材を小学校の英語教材としても活用してもらえるように追加教材も用意したので、本教材と共に申し込みいただければ提供したい。昨年のアンケートからは、企業との取組みを検討したいとする先生は7割を超えており、今後も先生方に活用の検討と共に改善点等の意見を頂戴し、次の教材開発につなげたい。

積水ハウス株式会社



発表者：信田由加里（コーポレート・コミュニケーション部CSR室）

当社は、人間性豊かな住まいと環境及び「住環境創造企業」を目指しており、地域と社会の一員として様々な社会貢献活動を実施している。2008年には環境省から業界初の「エコ・ファースト企業」としての認定を受け、環境大臣と交わしたエコ・ファーストの3つの約束に基づく環境教育プログラムを展開している。

1つ目の約束「生活時及び生産時のCO₂排出量削減を積極的に推進します」では、「キャプテンアースの『いえコロジー』セミナー」というプログラムを実施。各種実験を通じ「断熱性能」等について考え、省エネの暮らしへの理解と実現について学んでもらう。

2つ目の約束「生態系ネットワークの復活を積極的に推進します」では、「Dr.フォレストからの手紙」プログラムを実施。緑の専門家Dr.フォレストというキャラクターを使い、身近な自然をテーマにゲーム感覚で問題を解いていく。生態系や外来種問題を取り入れ、新たな知識や考え方を行動に繋げることを目的としている。

3つ目の約束「資源環境の取り組みを徹底的に推進します」では、「トレジャーハントツアー」プログラムを実施。ここでは3R（リユース・リデュース・リサイクル）を取り上げ、当社資源循環センターの見学により、資源循環についてわかりやすく学んでもらう。

こうした環境教育プログラムを実施することで、次世代育成のための環境貢献活動に取り組んでいる。この活動自体が当社の未来責任と考えている。

全国農業協同組合連合会



発表者：山崎 敏彦（広報部 広報SR課）

全農では「田んぼの生き物調査」を行っている。この生き物調査は、JA青年部が食の環境教育として各地の小学校・高校に対して実施しているが、一般募集の親子や高校生物部の学生に対しても昨年は伊勢原等で実習を行い、他にも「出前授業」として展開している。

田んぼの生き物調査とは、文字通り田んぼや水路に入り生き物の種類を調べるものである。虫あみと調味料入れを用意し、皆で一列に並んで同時に田んぼに入り、ゆっくり進みな

がら生き物をすくい上げて容器に入れていく。他にも水路調べや草花調べ、空を飛んでいる生き物も同時に調査する。採ったものは図鑑で名前を確認するが、概ね30～50種程度の生き物が見つかる。

この活動を通して、①命は繋がっているということ、②農の営みは生き物も生産しているということ、③ご飯一杯が稲株では約3株に当り、そこにはオタマジャクシが約35匹住んでいる。つまりご飯1杯食べると生き物もその分生きていけるということ、等を子どもたちに知ってほしいと考えている。

経営理念にも地球の環境保全に積極的に取り組むと記載されており、今後も生き物調査の拡大に努めたい。また、これまで首都圏中心に親子約400名を対象に「農業体験ツアー」を実施しているが、今後も田植えから収穫までを学ぶ出前授業の拡大や、「弁当の日」の支援、エコプロダクツ展への参加、各地でのイベント活動等々、積極的に展開していきたい。

P&Gジャパン株式会社



発表者：岩原 雅子（エクスターナルリレーションズ）

当社は、企業理念にサステナビリティを意識し「現在」と「未来」という言葉を入れ、持続可能な発展を目指して事業を推進している。そして環境保全と社会貢献を柱に、世界中で様々な活動に取り組んでいる。社会貢献の全世界的活動としては子ども支援を大きなテーマに据え、子どもたちの安全な飲み物プログラム等も展開している。

日本における社会貢献活動には2つの柱がある。1つは女性支援で、女性がより自立して社会に進出していけるよう支

援している。もう1つが子ども支援で「P&G水と生活の環境教室」というプログラムを展開している。

このプログラムは、当社の知識・ノウハウを活かし「水」をテーマに選び、次世代育成に貢献したいとの考えで、教育指導要領に則り教材を作成した。本社と工場のある兵庫県と群馬県では社員がボランティアで出前授業を行い、他の地域には授業用キット、テキスト等無償配布している。小学3～6年生までの社会・理科・家庭科等の教科にプログラムを設けているが、水の大切さから最終的には生活の中での節水について考えてもらうことを基本としている。またNPO日本水フォーラム、NPO日本持続発展教育推進フォーラムに監修いただくことでさらに信頼性を高めており、兵庫県では行政やNPOと連携し推進している点も特徴になっている。これまで全国約400校、5万人以上の児童に教材を届けた。今後も社員ボランティアを増やし、さらに活動を拡大したい。

株式会社リッチェル



発表者：寺崎 一郎（営業本部）

当社の環境教育資材「エコ栽培システム」とは、「太陽パネル」や「雨水タンク」を活用した環境にやさしい「緑のカーテン」の取り組みで、東北の仮設住宅にも提供させていただいた。これは太陽光の電力を使い、雨水タンクに溜めた雨水を水分センサーで自動給水し植物を育てるというもの。このシステムから、子どもに「暮らす」「食べる」「生きる」という3つのテーマについて体験し学んでもらいたい。

「暮らす」というテーマでは、地域の人たちと一緒にゴーヤを植え育て共に食べるなど、地域の人たちと一緒に暮らすという勉強ができる。「食べる」では、自分たちが育てた植物を食べるという体験をする。「生きる」では、植物と環境との繋がりを考え、本来のESDの目的をこのシステムの中で展開している。

これまでの実績としては、約2年前から東京都多摩市の教育委員会や学校等に環境教育資材として導入され、今年の3月にはユネスコスクールのホームページで参考例として掲載いただいた。そこでは、各地の小・中学校において実施されたゴーヤの植え付け・育成、ネット作り、ツルをネットに這わせる作業や、そうした作業を通しての地域の方たちとの触れ合いの様子等を紹介している。

この環境教育資材のESDへの導入を検討いただき、持続可能という言葉の中で、子どもたちが「暮らす」「食べる」「生きる」ことを学び育てられるよう協力していきたい。

【協力企業・団体展示】



【CSR レポート】



【情報交換会】



閉 会 式

■閉会式概要

大賞他5賞の表彰式の後、閉会の挨拶で締めくくられた。

(司会：浅井 孝司 文部科学省 大臣官房国際課国際協力政策室長)

1. 表彰式

1) 講評：島津 正数

(NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事)

大賞設立の狙い、審査観点、各受賞校へのコメント等が述べられた。

2) 表彰

賞状授与：見上 一幸

(宮城教育大学副学長、NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事)

副賞授与：若尾 久 (カシオ計算機株式会社)

賞状・副賞の授与後、各受賞校代表者から受賞のお礼とコメントが発表された。



「持続発展教育（ESD）大賞」…奈良県奈良市立柳生中学校

- ・全校18名の小規模校だが、学校の元気を地域に届けたい思いで、昨年からESDの観点での活動を始めた。受賞を今後の活動の糧にした。



「ユネスコスクール最優秀賞」…宮城県気仙沼市立階上中学校

- ・防災に関するESDに取り組んでいる。子どもと地域の方の命を協力して守っていくことが教師の使命と考えている。

「小学校賞」…広島県福山市立駅家西小学校

- ・ESD実践で思うのは、ESDな子ども、ESDな先生、ESDな職場が育つということ。ESDは優れた実践研究だと思う。



「中学校賞」…東京学芸大附属国際中等教育学校

- ・本校の役割は小中高一貫した形でESDに取り組むこと。前期課程の中学校での受賞となり後期の取組みが課題。

「高等学校賞」…秋田県秋田市立秋田商業高等学校

- ・総合的学習時間に校内組織としてユネスコスクール班があり、これまでの実践を3冊の本にまとめ出版したのでご覧きたい。

「審査委員特別賞」…千葉県市川市立稲越小学校

- ・食育の分野で受賞できたことに驚いている。これまでと違う観点からESDを見直していきたい。

2. 閉会の挨拶

◆岡山 慶子 (NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事)

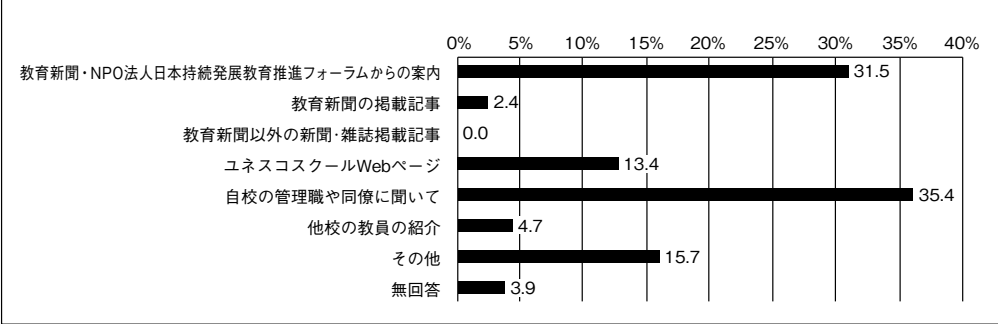
大会開催協力への感謝と討論による成果、気仙沼や東北の先生方の参加で「生きる力」と復興への自信を頂いたこと、最終会合に向け共に研究していきたい、等が述べられた。



事後アンケート結果

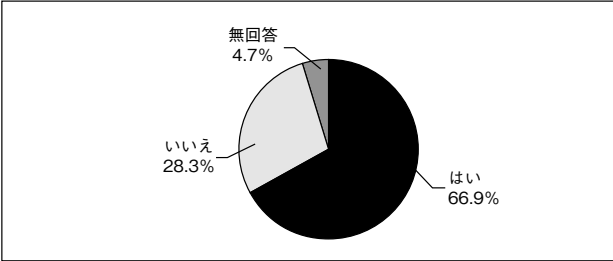
Q1 研究大会認知経路 (MA)

n=127



Q2 ユネスコスクール登録校ですか

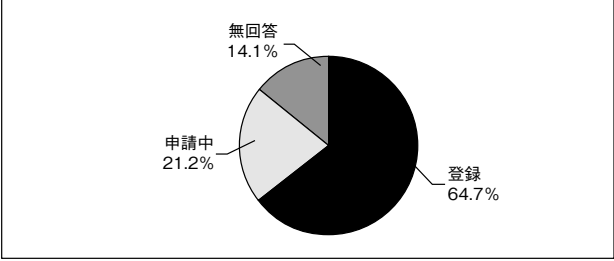
n=127



(ユネスコスクール登録校の方に)

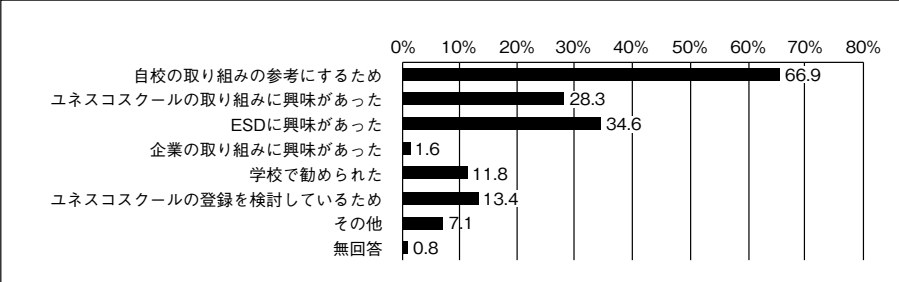
Q2 ユネスコスクール登録・申請中の内訳

n=85



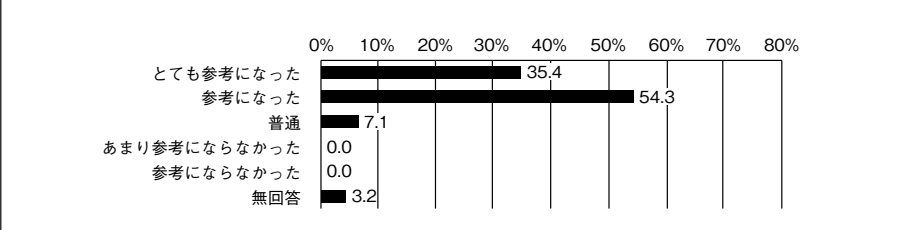
Q3 本研究大会参加理由 (MA)

n=127



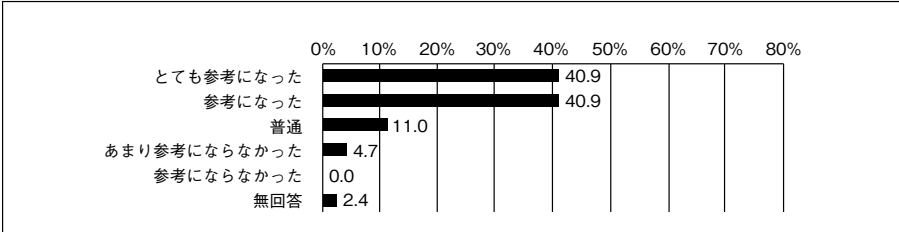
Q4-1 研究授業の参考度

n=127



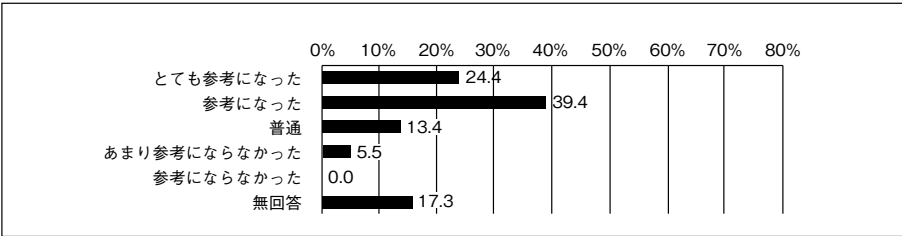
Q4-2 交流研修会の参考度

n=127



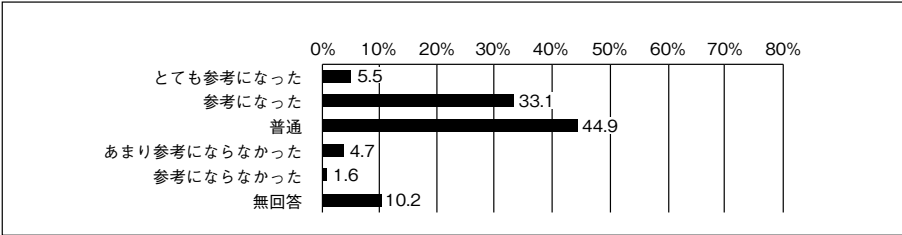
Q4-3 シンポジウムの参考度

n=127



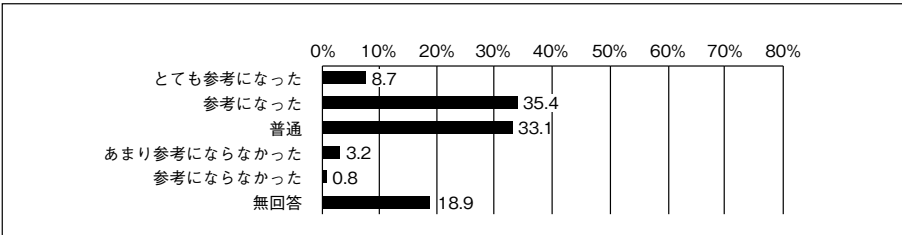
Q4-4 企業展示の参考度

n=127



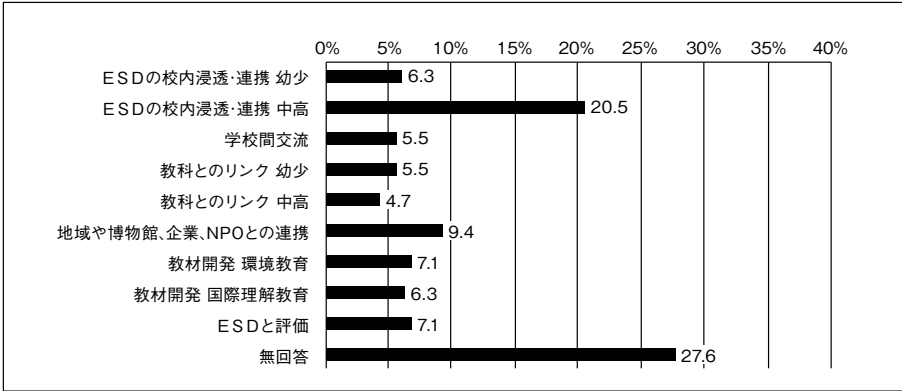
Q4-5 団体展示の参考度

n=127



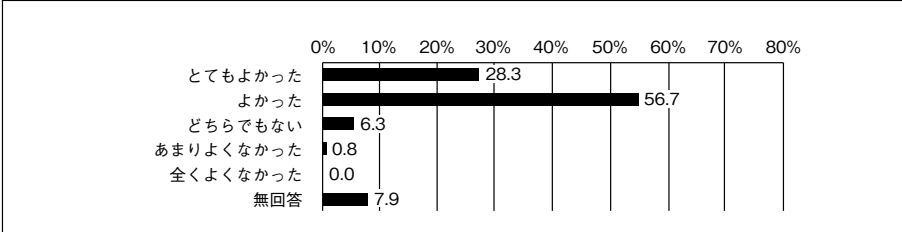
Q1 交流研修会参加セッション

n=127



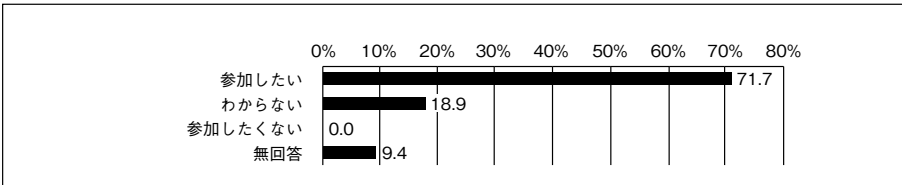
Q5 大会全体の感想

n=127



Q6 次年度以降の参加意向

n=127



協力企業一覧

カシオ計算機株式会社

サンウエーブリフォームショップR&B

積水ハウス株式会社

全国農業協同組合連合会

ダノンウォーターズオブジャパン株式会社

P&Gジャパン株式会社

株式会社リッチェル

展示団体一覧

特定非営利活動法人開発教育協会／独立行政法人国際協力機構（JICA）

ジャパンアートマイル実行委員会／一般社団法人たったひとつの命

国立大学法人東京海洋大学／財団法人日本漢字能力検定協会

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟／フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）

CSRレポートご提供企業

伊藤忠商事(株)／ヴェオリア・ウォーター・ジャパン(株)／キッコーマン(株)／キューピー(株)

共同印刷(株)／国際紙パルプ商事(株)／コスモ石油(株)／コニカミノルタホールディングス(株)

住友電気工業(株)／全日本空輸(株)／(株)損害保険ジャパン／大成建設(株)／TDK(株)

東洋インキＳＣホールディングス(株)／日本紙パルプ商事(株)／日本電気(株)／日本電信電話(株)

日本マクドナルド(株)／ハウス食品(株)／(株)バンダイ／(株)日立製作所／(株)日立ハイテクノロジーズ

富士通(株)／富士フイルムホールディングス(株)／(株)ブリジストン／古河電気工業(株)／三井化学(株)

三井住友海上火災保険(株)／三井物産(株)／三菱重工業(株)／三菱樹脂(株)／三菱商事(株)

(株)モスフードサービス／ヤマト運輸(株)／雪印メグミルク(株)／横浜ゴム(株)／ライオン(株)／ワタミ(株)

第３回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育（ＥＳＤ）研究大会 報 告 書

発行日：平成24年３月１日

発 行：ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒110-0005 東京都台東区上野3-17-7

Tel：03-3832-3581

Fax：03-3832-3570

E-mail：info@jp-esd.org